

腱板損傷の発生要因に関する解剖学的検討

今田岳男* 望月 由** 菊川和彦** 柏木健児** 生田義和** 安田峯夫***

*加計町国保病院整形外科 **広島大学整形外科 ***広島大学第1解剖

本研究の目的は肩関節の骨性構造と腱板損傷の関係を解明し、腱板損傷の発生要因となる骨性構造を検討することである。

対象は解剖用屍体標本30体60肩と腱板損傷の手術を行った20例40肩（患側20肩，健側20肩）であり，50例（男30例，女20例）100肩である。平均年齢は71.9歳（38歳から98歳）であった。腱板損傷の有無を観察し，肩峰の形態（Biglianiの分類），烏口肩峰靭帯外側縁距離（CAD），烏口肩峰間最短距離（CADm），slope angle（SA，青木ら），lateral acromion angle（LAA，Banasら）を測定した。手術例は3

次元CT画像により行った。各測定項目と腱板損傷の関係をt検定（対応なし）を用いて統計学的に検討した。

CADでは腱板損傷群で平均 32.7 ± 2.0 mm，非損傷群で平均 36.3 ± 3.9 mmで損傷群と非損傷群間に統計学的有意差（ $p < 0.0001$ ）を認めた。それ以外の項目では損傷群と非損傷群間に有意差を認めなかった。

今回の調査結果は烏口肩峰アーチが腱板損傷と密接な関係があることを示唆し，特に烏口肩峰靭帯外側縁距離は腱板損傷に影響を及ぼす要因の一つであると推測された。